

第1期中期計画

実績報告書

<平成28年度～令和2年度>

学校法人 常葉大学

学校法人常葉大学 第1期中期計画 実績報告書 ＜平成28年度～令和2年度＞

■実績報告書について

本法人は、平成28年3月に「学校法人常葉大学の長期ビジョン・中長期計画等」（実施年度：平成28年度～令和2年度）＜第1期中期計画＞を策定し、同計画に基づき教育事業を推進するとともに、令和元年5月には実施状況の中間報告をホームページ上で公表いたしました。

第1期中期計画は、令和2年度をもって実施期間が終了しましたので、その実施状況を実績報告書としてとりまとめました。なお、第1期において十分に達成できなかった項目については、第2期中期計画にも盛り込み、継続して取り組んでまいります。

1. 常葉大学

(1) 大学運営のための組織体制の整備

部長会、教授会、各種委員会など、学内組織の機能分担をより明確にし、全学的審議機関である「部長会」を責任主体として、学長のリーダーシップの下、「大学企画運営会議」「自己点検・評価委員会」「FD・SD委員会」とが連携し、教育の質を保証する体制を整備した。

(2) 教育の質を保証するための抜本的なカリキュラム改善

平成25年度の常葉学園大学、浜松大学及び富士常葉大学の3大学統合を契機にカリキュラム改革に取り組み、平成30年度から新カリキュラムによる教育を開始した。

(3) 各種基本方針に基づく具体的方策の実施

研究推進については、共同研究費の効果的な執行や外部資金の採択に向けた支援の充実を行い、地域連携・交流推進については、本学が中心となって申請した事業が文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業タイプ5（プラットフォーム形成）」に採択された。

また、高大連携については、高大連携学長・校長会議を立ち上げ、附属高校を対象とした連携講座の開催や「附属高校推薦入試（指定校推薦）」の新設など、高大接続教育の強化に努めた。さらに、3附属中学・高校が共催したアクティブ・ラーニング（主体的、対話的で深い学習）授業研修会に大学教員も参画し、大学教員及び中高教員の指導力並びに授業力強化に取り組んだ。

(4) 少子化に対応した学生確保対策と入試改革の実施

令和3年度入試から導入された新しい入学者選抜制度に関しては、大学及び各学部・学科のアドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）に適った入試改革について検討した結果、AO入試を廃止し、学力の3要素と高校における活動状況などを重視する「総合能力入試」を新設し、実施した。

(5) 学生の満足度向上を図るための各種支援

教学支援については、「主役は学生プロジェクト」を発足させ、学生アンケートの実施や学生代表と大学の役職教員との懇談会などを開催して学生の意見をくみ取るとともに、それらの声を大学運営に反映させることによって学生の満足度を高めるよう努めた。

また、平成30年度に静岡草薙キャンパスを新設したほか、静岡・浜松両キャンパスに基礎教育センター並びに学生支援センターを設置して、学生の様々なニーズに対応できるよう体制を整えた。

(6) 教育研究組織のあり方の検討

地域に根差す大学としての使命を果たすため、よりよい教育研究活動並びに地域貢献活動を目指し、様々な観点から教育研究組織のあり方について継続的に検討を重ねている。

2. 常葉大学短期大学部

(1) 学科再編を視野に入れた大学運営

実情に見合った適切な学校運営を期して、保育科、日本語日本文学科及び音楽科の定員を変更するとともに、英語英文科、専攻科国語国文専攻及び同保育専攻を廃止した。

(2) 教育組織の構築と各種規程などの見直し

常葉大学と連携した委員会組織を構築するとともに、教員の任用及び昇任に関する規程・基準の一部を改正した。

(3) リカレント教育、国際交流、地域貢献を含む環境整備

教職支援センターと連携した保育ゼミナールや教員免許更新講習、地域貢献センター及び地域連携推進委員会と連携した公開講座や公開演奏会（音楽科）などを実施した。

(4) 3ポリシー（AP、CP、DP）の制定とカリキュラム改正

本科及び専攻科ともにアドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）及びディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）の3ポリシーを策定し、ホームページ上で公開した。

また、教養教育科目並びに日本語日本文学科、音楽科及び専攻科音楽専攻は平成30年度から、保育科は平成31（令和元）年度から、それぞれ一部改正したカリキュラムを実施した。

(5) 少子化に対応した学生確保対策

常葉大学と入学試験日、試験会場、募集広報などを共通して実施した。入試改革についてはA0入試を廃止し、学力の3要素と高校での状況などを重視する「総合能力入試」を新設し、実施した。

また、オープンキャンパスではそれぞれの学科の特性を活かした内容を盛り込み、より充実したオープンキャンパスを実施している。

(6) 組織体制の維持・継続

科長会、教授会、各種委員会など、学内組織の機能・役割をより明確にし、全学的審議機関である「科長会」を責任主体として、学長のリーダーシップの下、教育の質を保証する体制を整備した。平成30年度からは、常葉大学の委員会に短期大学部の教員が加わることで、常葉大学と連携のとれた組織体制を構築した。

(7) 学生生活の支援の充実

学生アンケートや学生と教員との懇談会などを通じて学生の意見をくみ取り、それらの声を短期大学部の運営に反映させることによって学生の満足度が高まるよう努めている。

3. 常葉大学附属常葉中学校・高等学校

(1) コース別・系統別による教育内容の改編

平成30年度から総合進学コースを常葉大学進学コースに、平成31（令和元）年度からグローバルスタディーズコースを特別進学コースに変更した。常葉中学校においては、総合的な学習の時間をキャリア教育に重点を置く教育内容に改編した。

(2) 常葉大学・短期大学部の高大連携強化

進路ガイダンスの第1回目を常葉大学の各学部学科紹介から始めた結果、常葉大学及び同短大部への進学意識が高まった。また、定期的な地域清掃などのボランティア活動が、生徒会の企画や部活動独自の取り組みとして行われた。

(3) ICT教育の推進とコミュニケーション能力の育成

附属3 中学校合同のアクティブ・ラーニング（主体的、対話的で深い学習）研修会を実施し、ICT教育の推進を目指して図書館にiPad4 0台を導入し、Wi-Fi設備も整え、これらを活用した研究授業も行った。ALTとのチームティーチングを充実させ、中学校とともに英語教育を重視し、国際社会で活躍できるコミュニケーション能力の育成に努めた。

(4) 防災や危機管理意識向上に関する指導の充実

環境美化への取り組み、あいさつ運動、ネット利用マナー講座、防災訓練などを教職員・生徒ともども実施し、地域の環境や防犯及び防災などにおける意識向上の効果が認められた。

(5) PTA、母の会、同窓会、地域住民に対する情報発信

ホームページをリニューアルするとともに、大型の校外掲示板を活用し、部活動の活躍や本校主催説明会などの日程を掲示するなど、情報発信に努めた。

(6) 常葉大学・同短期大学部との連携を柱にした生徒募集

同窓会などを通じて積極的に広報活動に努め、募集広報推進委員が精力的に募集活動に取り組んだが、目標達成にはなお一層の定員確保対策が必要である。

4. 常葉大学附属橘中学校・高等学校

(1) 教員の資質向上

常葉大学教員を助言講師として、附属中学校・高等学校のアクティブ・ラーニング（主体的、対話的で深い学習）に関わる研修会を実施した。教員が校内外での研修に参加することによってスキルアップに努め、授業内容の充実を図り、生徒の学力向上に取り組んだ。また、新学習指導要領の改訂に伴う、評価変更に対応すべく研修会や会議を重ねた。

(2) 授業改善による学力の向上

生徒の主体性や思考力を伸ばすことを目的として、「タチバナクエスト」という問題解決型学習を取り入れ、「大学入学共通テスト」に向けた対応を図った。また、ICT教育を推進することによって、個別学習への対応を深めた。

(3) 進路指導の充実

駿台予備校の講師を招き、本校全教員に対して「大学入学共通テスト」についての研修会を実施した。さらに、ICT機器の習得やインターネット学習支援の導入を図るために、内部研修会を積極的に開いた。

(4) 生徒指導の充実

「交通安全」「薬学講座」「ネットマナー講習」などへの取り組みを計画的・積極的に実施した。また、令和2年度から生徒課を中心に、時代の流れに沿った「新しい生徒指導」への取り組みを検討している。

(5) 学校行事の見直し

進路意識の啓発を図るべく、英数科・一貫αコースで東京や名古屋の大学への見学を実施するとともに、将来のリーダーになるための「リーダーゼミ」などを実施した。また、各種講演会などを通して、幅広い視野の育成に努めた。

(6) 環境美化、公共物を大切にす指導

公共物を大切にす心を育てるために、美化委員、部活動やボランティア活動に積極的に参加するように促した。また、SDGsの取り組みを実践しながら、生徒達に環境問題にも目を向けさせている。

(7) 人間教育を大切にされた部活動重視

部活動の指導において「競技・種目=人間形成のための手段」「部活動=社会の縮図」という位置づけで全部活動を運営した。また、法人の部活動ガイドラインにも沿いながら、生徒に過度な負担をかけないように配慮ながら部活指導を行った。

(8) 防災教育の徹底

新校舎や新グラウンドにおける防災計画を作成した。また、生徒を対象とした避難訓練を実施したほか、教員には、緊急時対応マニュアルを作成して周知させた。

(9) 中学校の教育改革

3年生の学力定着のため、習熟度に応じた補講（8月）を行い、全校交流会（10月）や職業体験（12月）など、将来について考えさせる新たな取り組みを実施した。また、iPadを3年間の無償貸与とすることによって、新しい教育へ積極的に取り組ませた。

(10) 新校舎完成と常葉大学との連携を柱にした生徒募集

入試広報会議を通して、説明会の内容を来校者目線で検討した。また、コロナ禍における説明会であることを考慮し、開催回数を倍に増やし、感染防止にも十分配慮して実施した。結果的に、単願者の数はこの10年間の中で最も多く、定員も確保することができた。

5. 常葉大学附属菊川中学校・高等学校

(1) 科・コースの特徴を生かした効果的な指導の実践

美術デザイン科では実技講習会に卒業生を招き大学での学びを後輩に指導した。普通科の一貫コースでは、高校生が中学生に学習指導するタンデム学習や夏の集中講座などを実施した。科・コース毎の集会や進路体験発表を行い、それぞれの目標に合わせた進路指導や生活指導に取り組んだ。その中の1つである菊川市との地域連携においては、地域貢献だけでなく社会性を養えた。

(2) 授業内容の充実による学力の定着

ほとんどすべての科目においてアクティブ・ラーニング（主体的、対話的で深い学習）を行い、能動的な学習習慣の育成を行った。また、学内での各テストや校外模擬試験の結果の分析などを行い、効果的な学習指導体制作りを実施した。これらの取り組みは学力向上に不可欠なため、今後も継続する。

(3) 事故やいじめや非行などを未然に防ぐ生徒指導

挨拶・服装・身なりなどの基本的な生活習慣やマナーなどの社会生活の基礎を身につけることを根幹に据えた指導を行い、事故やいじめ、非行などを未然に防いだ。

(4) 進路指導の充実

全学年で二者面談や三者面談を特定の期間に行い、生徒や保護者の希望に合わせた進路指導を行った。ホームルームの時間を利用して受験概況など積極的な情報提供を行い、各科コース・学年の目標に合った進路情報を提供した。各学年において進路説明会を開催して常葉大学教員による大学説明、地域活動の実践を通して自らの進路について考える機会とした。

(5) 環境美化や公共物を大切にする指導

生徒会や委員会が協力して、放課後の教室点検を行い教室美化に努めた。また、生徒会が中心となり校内美化や部活動とも協力して地域のボランティア清掃を行った。

(6) 防災や危機管理に関する指導

毎年、9月に防災訓練として避難訓練、地域別集合訓練、消火訓練、校舎からの脱出訓練を行った。12月に行われる居住地の地域防災訓練への積極的な参加を呼びかけ、参加者を把握した。

(7) 学校行事・生徒会活動の充実

行事に積極的に参加させるために、生徒の自主的な行動を促し主体的に運営させた。この結果、教員が主導的に動いていた時より生徒の活動が活性化した。

(8) LHR・SHRの効果的な活用

中学では朝読書(読み聞かせ)を継続、全校集会を多く行い、全体での連携を大切にした。高校では学年ごとに集会や進路関連行事などを行った結果、生徒からは、科・コース内の連携づくり、クラス参加の行事に積極的な姿勢が見られるようになった。

(9) 部活動の充実

部活動を人間教育の場として捉え、その上でより高い目標に向かわせることができた。その結果、野球、空手、陸上、バドミントンなど多くの部活動が全国大会へ出場して活躍した。

(10) 信頼される学校づくり

「自己評価」と「学校関係評価」を実施してホームページ上で公表した。また、得られた評価結果を分析し、次年度の具体的な目標・方針・方策とした。このように評価を分析し、指導計画に反映させることは、よりよい学校づくりに不可欠なことから今後も継続する。

6. 常葉大学教育学部附属橘小学校

(1) 小中一貫教育の検討

中学校の教員が小学校の授業見学をしたり、本校の教員が中学校の授業を参観したりしてお互いの理解を深めることはできたが、小中一貫した教育課程の検討までには至らず、今後の検討課題となった。

(2) 創造的資質・能力の高い児童の育成

本校の教育目標である「生きる力を互いに高め合う児童の育成～三方よしの実践を通して～」及び重点目標の「確かな学力、たくましい心身、豊かな心」を達成するために日々の教育活動を実践した。

また、20人学級という少人数学級のよさを生かした指導、すなわち、一人一人に目が届くきめ細やかな指導をすることで創造的資質・能力の高い児童の育成が図られた。

(3) 教育研究小学校としての特色化

常葉大学教育学部附属小学校として研究テーマを定め、大学と連携して教科ごとに大学教員の指導、助言を受け、質の高い授業を展開できるよう努め、県内外の教員参加の「授業研究会」を実施することができた。

7. 幼保連携型認定こども園常葉大学附属とは幼稚園・たちばな幼稚園

(1) 教育・保育活動の拠点園としての機能

地域の保育ニーズに対応した未就園児を対象とした園開放や育児相談などの諸事業を実施した。特に、令和2年度は、新型コロナウイルス感染防止対策に万全を講じた上で実施に努めた。

(2) 時代の変化に応じた教育・保育の研究実践

両附属こども園の園児同士、附属橘小学校1年とこども園5歳児が交流活動を実施した。また、常葉大学・短期大学部の学生、附属高校生、附属中学生が園行事にボランティアとし

て参加し、連携を深めている。特に、令和2年度は、新型コロナウイルス感染防止対策に万全を講じた上で連携推進に努めた。

(3) 少子化時代に対応した機能の推進

両附属幼稚園は平成30年度から幼保連携型認定こども園に移行し、長時間保育や保育年齢の拡大といった現代社会からの要請に応えている。

8. 法人本部

(1) ガバナンス充実のための基本方針

教職員基本研修のプログラムの大幅な見直しを行い、特に管理職研修についてはOJTを活用した人事育成方法や労務管理を含めた外部研修を導入した。このほか内部監査で指摘された課題を改善するとともに、監査法人との意見交換の機会を充実するなど、三様監査との連携も強化してきた。

(2) コンプライアンス強化のための基本方針

コンプライアンス委員会において行動規範及び倫理行動基準を制定し、「コンプライアンス・マインドカード」を全教職員に配布した。このほか、コンメンタールの整備、業務マニュアルの作成、コンプライアンスチェック体制の確立も取り進めた。

(3) 建学の精神～建学の精神の再検証～

3中学・高校が名実ともに常葉大学の附属学校となり、法人名を「常葉学園」から「常葉大学」に改称した平成29年度を契機に、学生・生徒はもとより、外部からも理解を得やすいよう建学の精神を平易な表現に再構築した。

より高きを目指して～ Learning for Life ～

常に青々とした葉を繁らせ、純白な花を咲かせて黄金の実を結ぶ橘こそ、常葉の象徴。美しい心を持ち、より高い目標に向かってチャレンジし、学び続ける姿勢こそ、常葉の精神。